

『振り向いたら負けや 茂と猛のマラソントーク』

今年東京においてオリンピックとパラリンピックが開催され、コロナ下にありましたが、日本の選手もなかなか活躍し、日本中が心配と応援との交錯した不思議な雰囲気になりました。

ところで、東京オリンピック・パラリンピックでも色々なふたごが活躍したようです。たとえば、日本では報道されなかったのですが、ロイター電は、1984年のロサンゼルス・オリンピック以来再び正式種目になったシンクロナイズド・スイミングのデュエットの部に、24組中3組のふたごデュエットが出場したことを伝えています。それは、スロヴァキア、エジプト、ブラジルのデュエットだったそうです。また、同じくロイターによれば日本のシンクロ団体チームには、ふたごの米田姉妹も出場したとしています。やはりふたごはシンクロ（同調性）に優れているのでしょうか。

更に、ふたごの活躍は体操競技においても見られました。日本は相継ぐライン・オーバーの減点で久しぶりのメダルを逃してしまいましたが、代わりに銅メダルを獲得した男子アメリカ・チームにハム兄弟というソーセージ、否、双生児が出場しています。

さて、皆さんは昔マラソン競技男子に大活躍したふたごがいたことを覚えていますか？そうです。宗兄弟です。その宗兄弟、つまり宗茂さん、宗猛さんの熱血対談が載っているのが、今回紹介する『振り向いたら負けや』です。この本は、以前『ツインズ』の別のところで紹介した荻原次晴さんの『次に晴ればそれでいい』とは違って、ふたごの二人が繰り広げるトークを収録したものです。荻原さんの本はふたごの対偶者がいない局面で書かれた次晴さんの素直な気持ちが表現されたもので、それはそれで貴重で感動的な本です。でも、この『振り向いたら負けや』の中で二人が繰り広げる対談は、それと勝るとも劣らないものです。実在のふたごが自分たちの思い出を書いた青春回想記や、編集者の手になるたとえば金さん銀さんの本などにはありますが、同じ世界に生きるふたごの競技者が対談し、それが本になったのは、世界中でも余り例がないのではないのでしょうか。

宗兄弟は、お母さんもこの本の中で書いているように、かなり「兄」「弟」の区別がはっきりしたふたごのようです。ですから小さいときから、茂さんの方が「兄貴」としての意識を持ち、実際そのように扱われていたようです。従って、マラソンの勝ち負けに関して言えば、少しか茂さんの方が勝っているのですが、二人が一位二位を競うようなレースでは、お兄さんの茂さんが全勝です。猛さんは、「兄貴には、負けてもいいんだという気が、ちょっとはあるのかな」と言っていますし、茂さんの方は、「二人の勝負になった場合、僕は絶対に勝つ」と思っているのです。これでは勝負になりません。全勝は当然です。でも、心の奥の深いところでは、「一位、二位を取れば責任を果たせる」というか、どちらかが良ければそれで満足できる部分があるのではないのでしょうか。現在、茂さんの方が旭化成の監督をしていますが、猛さんはまだ走っています。茂さんは「僕の方まで猛が走っているんで、自分も走ったことになるんです」と別のインタビューで語っていました。この辺りがふたごの不思議なところですね。ふたごの場合、片一方がやっていることを自分がやっているような気になるのでしょうか。かくいう僕も、ふたごの弟が言ってみれば家業を継いだ形になったので、それで結構満足して（自分も半分家業を継いだような気になって）、今の仕事に進んだ部分が大いにあります。

しかしながら競技者ですから、若い頃のライバル意識はかなり強くて、普段は一緒に練習するのに、隠れて一人だけ練習したり、違うことを言って相手を騙して、自分だけ練習したりしたこともあったようです。「きったねェな、お前は」と言われながら。今だから笑って話せるような、そんなエピソードで

す。

宗兄弟は、練習を常に一緒にこなしてきました。それは、本格的に長距離の練習を始めた中学の頃からです。そして、片一方が故障して練習を一ヶ月休んだとき、もう一人も一緒に練習を一ヶ月休んだと言います。中学生の時から大人になってもずっと練習は一緒なのです。少し思春期が始まり、一緒に歩くのが嫌なときも、練習は一緒に出来たそうです。それだけ走ることが好きだったし、また「走ることへの欲」があったのかも知れません。それと大変に面白いことですが、二人で歩くのが嫌な時期でも、友だちが混じってれば、一緒に歩いて帰宅できたそうです。この辺の微妙な心理は多くのふたごに共通するのではないのでしょうか。少し、お互いの間に相対化できる要素があれば、思春期の難しい時期でも、自分のふたご性と相手を認めることができるのです。

また、同じくどのふたごもそうでしょうが、宗兄弟も小学校の頃から「ふたご、ふたご」と囃し立てられるのが嫌だったそうです。そのくせ、実はしっかりと「ふたご」を利用します。高校生の時は健康診断を入れ替わって受診し、本当ならば出場できなかつたはずの大会に出場したり、社会人になってからも話したくない相手に偶然道で出会ったときなど、もう一方に成りすまして会話を逃れるなど、なかなか高度なテクニックを使っていて、随分参考になりました。

ジョギングが趣味なこともあって、僕は以前ジョギング専門雑誌を定期講読していました。その時のインタビューで、増田明美さんが宗兄弟のことを競技者としても人間的にも「神様みたいな人」と言っていたことを思い出します。そして、彼女がそう評したのも当然だなあと思わせるような本当に素敵で、ためになることをこのトーク集の中で一杯語っています。練習や競技についてだけではなくて、人間についてもです。そして、この本は男の一卵性のふたごのちょっとだけライバル意識のある、仲の良いペアを理解するのに格好の一冊だと思います。僕自身、読了後、小学生、中学生の頃のあれやこれやを、忘れていたことも含めて色々と思い出しました。皆さんも是非お読み下さい。きっと、ほのぼのとしみますよ。



宗茂、宗猛：『振り向いたら負けや 一茂と猛のマラソントーク』書影

宗茂、宗猛：『振り向いたら負けや 一茂と猛のマラソントーク』講談社。

荻原次晴：『次に晴ればそれでいい』TOKYOFM 出版。

『ツインズ』36号（ビネバル出版）から転載・修正

